

三びきのくま イギリス

昔むかし、あるところに、三びきのくまがいました。小さいちっぽけなくまと、中くらいのくまと、大きいでつかいくまでした。くまたちは、森の中の一軒家いっけんやに住んでいました。くまたちは、それぞれ自分用のおちゃわんを持っていました。小さいちっぽけなくまのは、小さいちっぽけなくまのくまのは、大きいでつかいくまのは、中くらいのくまのは、中くらいのおちゃわんで、大きいでつかいくまのは、大きいでつかいくまのは、中くらいのくまのは、中くらいのおちゃわんで、大きいでつかいくまのは、大きいでつかいくまでした。それから、くまたちは、それぞれ自分用のいすも持っていました。小さいちっぽけなくまのは、小さいちっぽけないすで、中くらいのくまのは、中くらいのいすで、大きいでつかいくまのは、大きいでつかいくまでした。小さいでつかいくま。それから、くまたちは、それぞれ自分用のベッドも持っていました。小さいちっぽけなくまのは、小さいちっぽけなくまのベッドで、中くらいのくまのは、中くらいのベッドで、大きいでつかいくまのは、大きいでつかいくまのベッドでした。

ある日のこと、くまたちは、朝ごはんにおかゆを作りました。あつあつのおかゆをそれぞれのおちやわんによそうと、口をやけどしないように冷さましておくことにしました。おかゆが冷めるのを待つあいだ、くまたちは森へさんぽに出かけました。

さて、くまたちは出かけているあいだに、おばあさんがひとり、くまたちの家にやつてきました。おばあさんは、まだから家の中をのぞき、それからドアのかぎあなからのぞきました。そして、家の中にだれもないのが分かると、そつとドアをおしてみました。力ギはかかるつていませんでした。そこで、おばあさんはドアを開けて中へ入つていきました。すると、テーブルの上におかゆがのつていました。おばあさんは、大よろこびでおかゆを食べはじめました。

まず、大きいでつかいくまのおかゆを食べてみました。あつくてとても食べられません。おばあさんはぶつぶつもんくをいいました。つぎに、中くらいのくまのおかゆを食べてみました。つめたすぎます。おばあさんはまたぶつぶつもんくをいいました。それから、小さいちっぽけなくまのおかゆを食べてみました。あつくもつめたくもなくちょうどいいあんぱいだったので、おばあさんは、すっかり平らげてしまいました。でもおちゃわんが小さくてちょっとしか入つてなかつたので、やつぱりぶつぶつもんくをいいました。

それからおばあさんは、大きいでつかいくまのいすにすわつてみました。けれどもいす

は堅かたすぎました。おばあさんはぶつぶつもんくをいいました。つぎに中くらいのくまのいすにすわってみました。やわらかすぎます。またぶつぶつもんくをいいました。それから、小さいいちつぽけなくまのいすにすわってみました。堅くもやわらかくもなくちょうどいいあんばいだったので、おばあさんは、いつまでもそのいすにすわっていました。それで、しまいにいすの底きのいがぬけて、おばあさんはドシンとゆかに落つこちてしまいました。おばあさんは、やつぱりぶつぶつもんくをいいました。

それから、おばあさんは、二階の寝部屋ねべやに上がっていきました。そこには、くまたちのベッドがならんでいました。

おばあさんは、まず、大きいでつかいくまのベッドに寝てみました。頭のほうが高すぎてとてもねむれません。おばあさんはぶつぶつもんくをいいました。つぎに中くらいのくまのベッドに寝てみました。足のほうが高すぎます。またぶつぶつもんくをいいました。それから、小さいいちつぽけなくまのベッドに寝てみました。頭も足も高すぎず、ちょうどいいあんばいだったので、おばあさんは、いい気持ちでふとんをかぶり、ぐうぐうねむりこんでしました。

さて、くまたちは、もうおかゆが冷めたころだと思って、家に帰ってきました。すると、大きいでつかいくまのおちやわんにスプーンがつつこんでありました。

「だれか、ぼくのおかゆに口をつけたな」と、大きいでつかいくまが、でつかい声でいました。見ると、中くらいのくまのおちやわんにもスプーンがつつこんであります。

「だれか、ぼくのおかゆに口をつけたな」と、中くらいのくまが中くらいの声でいいました。小さいいちつぽけなくまが自分のおちやわんを見ると、中はからっぽでした。

「だれか、ぼくのおかゆに口をつけたな。そして、ぜんぶ食べちゃった」と、小さいいちつぽけなくまがちつぽけな声でいいました。

くまたちは、だれかが家に入ってきて、小さいいちつぽけなくまのおかゆをぜんぶ食べたことがわかりました。そこで、家中を見まわしました。すると、大きいでつかいくまのいすからクツーションが落つこちていました。

「だれか、ぼくのいすにすわったな」と、大きいでつかいくまがでつかい声でいいました。中くらいのくまのいすはクツーションがへしやんこにへこんでいました。

「だれかぼくのいすにすわったな」と、中くらいのくまが中くらいの声でいいました。小

さいちつぽけなくまが自分のいすを見ると、いすは底そこがぬけてぶつこわれていました。

「だれか、ぼくのいすにすわったな。そして、ぶつこわしちやつた」と、小さいちつぽけなくまがちつぽけな声でいました。

くまたちは、もつとよく調べてみようと二階の寝部屋に行きました。すると、大きいでつかいくまのベッドからまくらが落つこちていました。

「だれか、ぼくのベッドで寝たな」と、大きいでつかいくまがでつかい声でいました。中くらいのくまのベッドはまくらがべしやんこにへこんでいました。

「だれか、ぼくのベッドで寝たな」と、中くらいのくまが中くらいの声でていました。小さいちつぽけなくまが自分のベッドを見ると、まくらの上にだれかの頭が乗つかっていました。

「だれか、ぼくのベッドで寝たな。そして、まだ寝ているぞ」と、小さいちつぽけなくまがちつぽけな声でいました。

おばあさんは、ぐつすりねむっていました。それで、大きいでつかいくまのでつかい声が聞こえても、風がうなっているか、かみなりが鳴っているのだと思いました。中くらいのくまの中くらいの声が聞こえても、ゆめの中でだれかがしゃべっているのだと思いました。けれども、小さいちつぽけなくまのちつぽけな声が、あんまりキーキーかん高い声だったので、おばあさんは、すぐに目をさましてとび起きました。すると、ベッドのわきにくまが三びき立っていました。おばあさんはベッドの向こうがわへ転がり落ちると、まどべに走つていって、まどから外へとび出しました。

それからおばあさんはどうなつたのでしょうか。まどから落ちて首の骨ほねをおつたのか、森ににげこんでだれも知らないところへ行つてしまつたのか、おまわりさんにつかまつて牢屋ろうやにぶちこまれたのか、それはだれにも分かりません。でも、くまたちはそれから一度とおばあさんに会いませんでしたとや。

おしまい。

原話:『English Fairy Tales』JOSEPH JACOBS

訳・再話:村上郁